

パスカル「慰戯」について

上田, 富美子

<https://doi.org/10.15017/80>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 4, pp.21-29, 1977-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

パスカルの「慰戯」について

上 田 富 美 子

《Divertissement》 de Pascal

Fumiko Ueda

パスカルの人生における大きな転機は、彼の短い生涯の終りに近く、1654年11月23日聖クレメンスの日の深夜、突如彼をおとずれた「火」(Feu)という体験によって決定的になったと言われている。¹⁾ しかしながら人生における「回心」は突如おとずれるにもせよ、無から生れ出ようはずもなく、そこには先立つ長い苦闘の日々があったと見なければなるまい。これは私たち自身のささやかな経験に照らしても、ある程度首肯できることであろう。長い模索と試行錯誤のはてに絶望が私たちを打ちのめすかに見えた時、私たちの前に新たな展望が用意されること——この不思議な事実。この事実はおそらく、人間であることと無縁なことではあるまい。私はパスカルの中にそれを見る。彼はたしかに、私たちを超えて偉大であったとすることが出来る。だがその偉大さは、彼がその全生涯を賭けて人間であろうとしたこと、その努力において遙かに私たちを凌駕していたこと、この点のみに見出せるように思える。だからこそ、300年以上の時日の懸隔にもかかわらず、彼はなお永遠の指標として私たちの前にその輝きを失わないでいることができたのではあるまいか。人間パスカル——その回心に至る苦闘の軌跡の中で「慰戯」(divertissement)²⁾を見落すことは決してできないだろう。そこで以下この観点に立って「慰戯」についての考察をすすめて行きたい。

「慰戯」(divertissement)はパスカルの「パンセ」《Pensées》においてきわめて重要な位置を占めるものと思われるが、その叙述が

まとまりを欠くのは「パンセ」の成り立ち上ある程度止むを得ないことである。³⁾ そこで「慰戯」について未整理のまま任意に与えられた叙述を統一的に把握し、パスカルの「慰戯」についての見解の全貌を明らかにすることが第一になされなければならない仕事である。だがそれに先立ち、パスカルの「慰戯」について簡略な素描が与えられることがまず必要なことに思われる。パスカルのいわゆる「慰戯」の中には「狩」(chasse)、「賭けごと」(jeu)などの娯楽・遊びは無論のこと、「会話」(conversation)、それに「仕事(職業)」(emploi)や「戦争」(guerre)さえもえ数入れられている。言い換えるならば、人間のあらゆる営為が「慰戯」の中に包括されていると見なして差し支えない。そしてこれらが特に「慰戯」と呼ばれることの根拠は、人間が孤独のうちに「自己」(soi)と向き合う時行き当らざるを得ないその「本来的」(natural)在り方のうちに、すなわち「死」(mort)を極とする自己の「不幸」(malheur)「悲惨」(misère)のうちに求められている。だから人は何よりも孤独で退屈(ennui)な状態に陥るのを避けようとし、そこで遭遇する不幸でみじめな自己の在り方から眼を転じ気を逸らせ(divertir)ようとする。そしてこのような一連の「気紛らし」の行為が、パスカルにおいて特に「慰戯」と名付けられているのである。行為の成立条件がこの点に見出せる限り、どのような行為であれそれらはみな「慰戯」の名を以て呼ばれることが可能である。(139~143⁴⁾ 参照)

このような「慰戯」についての簡略な素描を

踏まえて詳細な論述を展開する前に、ここにいわゆる「自己」(soi)とは何であるかがまず解明されなければならない。なぜなら、これこそが「慰戯」の根拠なすものと考えられたのであったから。それはさきに見たように、みじめで救いがたい自己であり、だからこそ人はそのような自己に直面するのを避け「慰戯」に走らざるを得なかったのであるが、ではなぜ、この場合「自己」はそのように「不幸」、「悲惨」と見なされなければならないのであろうか。たしかに終局的には「死」が用意されており、そこに向って歩み続けなければならないことは、人間にとって最高の不幸・悲惨であると言うことはできるであろう。それはパスカル自身、このような自己への思いが最終的には「死」への思いに導くと指摘しているところでもある。

(139, 143) しかしながら、問題はその一点にとどまるものではあるまい。いかにして「死」に至るか、その過程こそ問題なのではないだろうか。そしてこの過程こそ、パスカルのいわゆる不幸でみじめな「自己」につながるもののように思われる。だがその点に関してパスカルは取り立てて述べることをしていない。ただ彼の叙述の中にそれを推測することは可能である。パスカルは言う、「彼らはあの職につくことができたなら喜んで休息するのだがと思う、そして欲望(cupidité)のもつ飽くなき本性のことは気付かない。彼らは休息をまじめに追求していると考えている、がそのじつ動揺(agitation)を求めているに過ぎない。」(139) これらは「慰戯」にふける人々を衝き動かす原理が「欲望」(cupidité)であることの指摘であり、ここには自ら気付かずして満たされることのない欲望のままに操作され続ける人間の姿が描き出されている。しかも欲望は一見自己自身の内部から自然に誘発されるようであり、じつは自己の外なるものに支配されている点が見逃されてはなるまい。パスカルはそれを「依存性」(dépendance)と名付ける。(130, 170) そしてこの外的なものに操作される欲望の持続性の根拠、すなわちそれが休息なき絶えざる「動揺」(agitation)として捉えられることの根拠は、

そこでの人間の在り方がいたずらに「未来」(avenir)志向的である点に求められる。パスカルは言う、「現在(présent)は少しも我々の目的(fin)ではない。過去(passé)と現在とは我々の手段(moyen)である。ただ未来(avenir)のみが我々の目的である。それゆえに我々は少しも生きはしない、ただ生きたいとねがう。」(172) つまりここに見られる人間像、すなわち「慰戯」の場合にいわゆる「自己」は、自らの欲望ないし衝動のままに動き続ける自己、言い換えるなら不確定な外在的要因に操作され続ける自己であり、そしてその持続性を主として未来への志向から得ている自己であると言うことができよう。パスカルはこのような自己の在り方をまた「不安定」(inconstance)とも規定した。(111, 112, 127など) このように見て来ると、ここにいわゆる「自己」は、身体性と不可分な生命体としての人間の在り方を指し示しているように思われる。「欲望」は実際、このような身体性を中心とした人間の在り方を抜きにしては考えられないものでもあろう。そしてパスカルはこのような人間の在り方に根ざすものとして、利己心に発する「自愛」(amour-propre) (100) や「虚栄」(vanité), 「傲慢(高慢または自負)」(orgueil) (150~153)などをあげている。

そうすると、このような自己の在り方の極点に位置する「死」はどのような意味をもつことになるであろうか。それは生命の終焉であり、身体の完全な破壊であろう。言い換えるなら、自己の容赦ない抹殺であり、徹底的消滅である。このような「死」は、人間を救いがたい恐怖で震撼せずにはおかない。「死」は正視に耐えない恐るべきものとして人間の生をおびやかす。それは身体をもつ生命体としての人間にとって、余りに自然の帰結であろう。だが単に直接的本能のままに生存するものにとっては、「死」の恐怖は人間の場合ほど圧倒的であるとは思われない。自己の在り方を見とおすことのできるものだけが、「死」を恐れることができる。したがって死を恐れるものには、そのような自己の在り方がたとえ明確でないにしても、何らかの

かたちで把握されているのでなければならぬ。パスカルは言う、「死のことを考えないで死ぬ方が、危険なしに死のことを考えるよりも耐えやすい。」(166) だから死を恐れるものは、その死に集約される自己の在り方、すなわち身体性に基づく自己の在り方に対しても完全に肯定的ではあり得なくなる。そしてこのような「死」へつながる自己の在り方のすべて、全過程こそパスカルが「慰戯」の根拠として前提したもののよう思える。

「慰戯」はこのように、身体性に基づく「死」を極点とする欲望中心の人間の在り方に対する自己意識に起因し、この自己意識はまた、死への恐怖を頂点とする救いがたい自己への意識につながり、それはすなわち自己の「不幸」(malheur)、「悲惨」(misère)として意識される。だから「慰戯」は何らかの自己意識に由来し、何らかのかたちで自己を知っている人間のみならず特有な事柄であり、本能のままに生きる動物には完全に無縁な事柄であると言うことができる。(140参照)ただ「慰戯」の場合同時に着目されなければならないのは、それは一つの自己意識であるにしても、むしろそれを抑圧し被覆しようとする心の動きに支えられている点である。ここにこそ、「慰戯」の他の行為と異なる特性は見出せる。それは一方不幸でみじめな自己の在り方を意識しながら、他方その在り方から眼を転じ気を逸らせ認めまいとする。だから「慰戯」は意図的であり、その背後に人間の意志が深く隠されている。

また「慰戯」がこのような相矛盾した意識の二重構造、すなわちある意識とそれを消し去ろうとする心の働きの上に成立するものである限り、それは人間の心に深刻な葛藤を強い、癒しがたい苦痛をもたらすことになる。そして「慰戯」の成立の基盤があくまでも自己の不幸・悲惨の意識に求められねばならない限り、この意識を紛らせ晴らそうとする行為は二次的であり、しかもこの意識は「死すべきもの」としての人間の基本的在り方に根ざす以上、気は紛らしても紛れないし、晴らしても晴れないことになる。このように見ると、人生は小止みない

「慰戯」の連続たらざるを得ない。パスカルは言う、「そういうわけで人は彼らをいくら忙しい目に合わせても合わせ過ぎることはなく、彼らの気をいくら逸らせても逸らせ過ぎることはない。それだからこそ、人は彼らに沢山仕事を用意した上で、もし彼らにしばらくくつろぐ暇ができれば、気晴らしのために、遊ぶために、また絶えず十分忙しくしているために、その暇を費すように彼とらにすすめるのである。」(143)またこのような観点からすれば、「王」(roi)もという身分は最連続的に切れ目なく「慰戯」の機会に恵まれ、しかも最も効果的な「慰戯」を与えられる身分にほかならないということになり(139, 142)、ここに当時の「王位」(dignité royal)に対するパスカルのきわめて独自の考え方をうかがうことができる。

また「慰戯」がこのような人間の本来の不幸・悲惨の意識を前提とするものである限り、そこから気を転じ紛らせる「慰戯」の行為は、きわめて強烈なものでなければその目的を達しないことになるであろう。つまりここでの行為の目的は気を紛らすこと自体にあり、通常の行為の場合に特有な目的は欠けているところにその独自性が見出せる。ここでは気紛らしの行為そのものが目的となっており、しかも行為そのものが目的であるということは、その行為の充足の尺度がその行為自体の激しさの度合に求められなければならないことになる。すなわち「慰戯」という行為の特徴は、通常の行為の場合と異なり、行為の目的が欠落し行為そのものが目的とされる点、したがって行為の激しさのみが追求される点にあると言うことができる。パスカルはこのような「慰戯」に特有な行為の形態、すなわち行為そのものを目的とする激しい行為の在り方を特に、「動揺」(agitationまたはtumulte)あるいは「さわぎ」(bruit)と呼んだ。そしてまた、人が「慰戯」において追求するものはただもう「荒々しい一つの仕事」(une occupation violente et impetueuse)だけなのだと言った彼が言う時(139)、そこには上述のようなこの行為独自の形態が示唆されている。「狩」(chasse)や「賭けごと」(jeu)が「慰戯」の典型的な

例としてあげられているのも、そのような意味においてであろう。また前述のように「慰戯」が目的という根を断たれたところに成立する行為である以上、何らかの目的達成のために行われる通常の行為に比べて、それは本質的にむなしい（vain）ものであり、その真の充足は得られようがないと言うことができる。

ところで、「慰戯」の行為の基本形態が行為そのものを目的とするところにあるのはさきに述べたとおりであるにしても、この行為はその本性上そこにのみとどまるものではなく、新たな派生的形態をもつことが可能である。この点は十分注意される必要がある。それはすなわち、一つの意識を欺き他へ転ずるという「慰戯」の根本性格に由来するものである。「慰戯」の成立基盤がそこに見出せる限り、「欺き」の効果を一そうあげるために（それはとりもなおさず、「慰戯」という行為のより完璧な遂行を意味するのであるが）、あらゆる手段が講じられるであろうことは容易に推定できる。ある一定の自己の在り方から眼を転じ気を逸らすという一つの欺瞞は、つぎつぎと新たな欺瞞を生み出さずにはおかない。パスカルはそこに「想像力」

(*imagination*) が一役買っているのを見抜いていた。「賭けごと」で獲得する金や「狩」で追跡する兎は、それ自体「慰戯」にふける人間にとって問題ではない。なぜならさきに見たように、「慰戯」においては行為そのものが問題とされる点が基本的なことであったのだから。しかし人間は「想像力」の助けをかり、それらを得たらさぞ嬉しいであろうと「自らを欺き」(*se piper*)、「情熱の対象をこしらえ」(*se former un sujet de passion*)、「このこしらえた対象に対して、彼の欲望、彼の怒り、彼の恐れをかきたてる」(*exciter sur cela son desir, sa colère, sa crainte*)のである。(139) つまり「慰戯」には人間のあらゆる術策を傾けた自己欺瞞への努力がともなうのであり、それがすでに一つの真実から根を断たれたところに成立する行為である限り、想像力に委ねられる領域が大となるのは自然な成行であろう。だがこれらの方策はすべて、「慰戯」の行為をいよいよ激烈にし、そ

の行為を十全に遂行するための手段に過ぎないのであり、その点においてこれらは「慰戯」の基本形態を何ら損うものではなく、むしろそれを助長するものであると言って差し支えない。しかしながら一方において、想像力の介入によるこのような自己欺瞞の努力、現代心理学にいわれる「自己暗示」にも相当する心的傾向は、やがて目的と手段をすり替えるところまで人を導かずにはおかない。すなわち「慰戯」における自己欺瞞の努力、換言すれば自己欺瞞の連続というかたちは、やがて人を「慰戯」の成立基盤から遠ざけしめ習慣性の次元へと移行せしめることになる。こうして、人にその行為がもともと「慰戯」であったことさえ忘れさせ、楽しく生かすところまで人を連れ去って行く。そこにおいては自己の在り方の悲惨に対する本質的苦悩は消え失せ、いな消え失せたかに見え、その行為は真実の根を断たれていることによって実体のない空疎なものであるにしても、そのゆえにかえって軽さを増し、苦悩を押しやることによって見かけ上の「幸福」(*bonheur*)さえ獲得する。「慰戯」に専心することによって、その行為は自己の悲惨な在り方に対する逃避から自己の幸福の錯覚の方へと人を導いて行き、それは一つの消極的形態からあたかも積極的形態へ転じたかのように人の眼を欺く。パスカルが「慰戯」こそが人を幸福にすると再三語っているのも(139, 168など)、おそらくこのような意味においてであろう。しかも一つの欺瞞が連鎖的に他の欺瞞を生むというこのような「慰戯」の在り方は、そのことによって人を十分多忙にし一瞬たりとも我に帰るいとまを与えないようにする。(143) このようにして、人生は自己の不幸を顧みる余裕を与えず、「幸福」のうちを人に死へと送り込む。(171)

だがここで注意されなければならないのは、上述のように、「慰戯」はその展開によって自己の不幸な在り方についての意識というその基盤を一見離れたかのように見えても、それが依然としてそのような在り方からの逃避である限り、そこからの完全な離脱はあり得ないということである。「慰戯」はいかにその基盤を遠く離れ

去ったように見えても、その射程内を脱しきれず、自ら意識しないにしてもその遠隔操作を免れることはできない。なぜなら、「慰戯」はまさにその点においてこそ「慰戯」と呼ばれたのであったから。そのことは「慰戯」がいかに巧妙精緻に仕組まれようとも、それらすべては身体的欲望の次元に投げ返されている点において明白である。「慰戯」は自分が一ばん避けたかったものに、かえって自ら落ち込んで行くという矛盾をもつ。人間が身体を有することから来るさまざまな欲望やその究極にある死、そしてそのような在り方を不幸・悲惨と感ずることから人は「慰戯」に走り、その専心は人知の限りを尽すことを人に強いたのであるが、そのような在り方から眼を背けたことによって、人はかえって深くその網の目の中に取り込まれて行くという皮肉な結果を招いたのである。自己の不幸の意識はたしかに人間的であり、人間特有のものではあろう。そして「慰戯」における想像力の助けをかりたあらゆる術策もまた、人間のみならず許される行為ではあろう。しかしながらこのはじめの意識を欺いたがために、あらゆる人間的能力は身体的欲望の次元を永久に低迷することになったのである。だが「慰戯」に見られる欲望の次元への低迷は、生命体としての人間の自然的欲求とは明らかに区別される必要がある。なぜなら「慰戯」には自己の在り方に対する不幸の意識という一つの自己意識が前提されており、これを介して再び欲望の次元へ投げ返されているのであるから、その行為は意図的人為的であり、生命体としての自然的要求に基づく諸活動とはその性格を全く異にするものと考えられるからである。だが現象的には、「慰戯」の行為は人間の自然的営為と区別されない。だから「慰戯」は人間的営為を詐称し、そうすることによって自らを正当化することができる。「慰戯」の例として「仕事」(emploi)や「スポーツ」などがあげられているのも、そのようなすり替えを前提とした上でのことであろう。なぜならこれらはいずれも、生命体としての自然的要求に基づく面をもむしろつよくもっているのであるから。したがって「慰戯」は人間の

さまざまな欲望を脱することができないばかりか、自然的欲求を詐称することによってその自然性の制約をはずし、人知を介入させることによってそれをかえって複雑化し拡大して行くのである。「慰戯」は好きなだけ欲望と結びつけることができ、制限なくそれをかき立てることができる。自然的欲求の詐称という「慰戯」のもつこの特性こそ、諸悪の根源ではあるまいか。パスカルはこのことに対し、言いがたい嫌悪の情をおぼえたに違いない。それは、「慰戯」についていろいろ語ったあとで吐き出すように言われた「何と人間の心はくぼんで (creux), 汚れに満ちている (plein d'ordure) ことか!」(143) という一言に端的に示されている。

しかしながらパスカル自身、このような「慰戯」の罅外に立っているのでは決してなかった。彼は自らも身体性とその究極の死という在り方を背負わされた人間として、「慰戯」に走りざるを得ない人間の弱さを十分に承知していた。だから彼は「慰戯」に明け暮れる人々の在り方を「不合理」(peu raisonnable) だと考える人は我々の「本性」(nature) を知らないものだと言い(139)、「休息のうちに暮す」(vivre en repos) ことをすすめるのも同じく「本性」を理解しないことだと言う。(139) また「慰戯」に走る人間の傾向を一つの「本能」(instinct) とも呼び(139)、さらに「慰戯」を求めようとしないことは「人間性を超えて自らを高めること」(s'élever au-dessus de l'humanité) を欲することであり、このようなことは「人間」(homme) でしかない我々にとっては不可能なことだとも述べている。(140) 人間は人間である限り「慰戯」を免れ得ないとするこのようなパスカルの見解はすべて、彼特有の人間性への深い洞察に由来すると同時に、彼自身の体験に基づく点が見落されてはならない。彼が「慰戯」について語ったあとで、誰も解き得なかった数学の問題を解いたことを、ただ学者たちに誇りたいがために書齋で汗を流す人物に触れた時(139)、そこに天才数学者として名望高かった若い日の彼自身の姿を重ね合わせることはさほど困難なことではないだろう。ここには、さき

に見たような欲望の次元に再び投げ返された「慰戯」の一つの例が見出せる。なぜならここに示された行為は「高慢（自負）」(orgueil)に由来するものであり、しかもこれははじめに述べたようにその根を身体的欲望中心の在り方の中にもつものだからである。

さて、以上を通じて明らかになるのは、パスカル自身も「慰戯」を求めざるを得なかった一人の人間として決して例外者ではあり得なかったこと、だからこそその構造をここまで深く精緻に捉えることができたということであろう。だが一方、「慰戯」についてのここまで透徹した見解は、その行為を対象化し観察することによってはじめて得られる点は十分注意される必要がある。だから「慰戯」について語るパスカルは、最早その行為におぼれきれない地点に立っているのであり、何らかの意味でその次元を超え出ているのでなければならない。このようにしてはじめて、「慰戯」は認識の明るみの中に引き出されることができる。それはまた同時に、「慰戯」の基本にある人間の在り方、すなわち身体性と欲望中心の人間の在り方が認識にもたらされることをも意味する。このような在り方は、「慰戯」におぼれている人間にとってはひたすらに忌避されて来たものであった。だがここでは、そのような在り方が対象化されることによって忌避されることなく正視されており、そこにおいてこそ認識の成立が可能になる。つまりここでは認識は単なる認識に終らず、意志の支えを必要とすることが示されている。すなわち「慰戯」について認識し得た人間は、かつて忌避されたものに逆に立ち向おうとする勇氣と決断をもった人間であり、そのような態度決定と姿勢の転換こそが認識を成立せしめる条件になっている。このような認識と意志・実践との不可分性は、特にパスカルにおいて顕著な点であり注目にあたいする。したがってここでは、身体性を中心とする人間の基本的在り方は対象化され認識にもたらされると同時に、客観的事実に転化し、恐れや忌避の及ばない次元へと移行する。それは、人間の力によってはどうすることもできない冷厳な事実として突きつ

けられる。そこでこの場合、人はそれを避けることの徒労を十分承知し、事実は事実として承認しながら、可能な範囲でそれを統御・管理しようとする方向性に向うことになるであろう。すなわちここでは、忌避から人間的対応の地平へと転換が行われている。それゆえに「慰戯」について認識した人間は、不可避的なことを恐れそこから逃げ去ろうとする愚かしさに就くよりは、自らの置かれた状況を直視し、それを引き受け、それをよりよく統御する賢さを選ぼうとする。そしてここに、「慰戯」におぼれている段階にいるものには見出せない新たな行動体系の出現を見るに至る。

ところでまた「慰戯」にふける人間の場合、「死」を終局とする身体性に基づく人間の在り方が「不幸」、「悲惨」と感ぜられたのであったが、そのような在り方を含めた「慰戯」の行点為そのものをすでに認識したものの場合、そのに関してはどうであろうか。前述のようにこの場合、そのような人間の自然的基本的在り方は一つの事実として受け取られているのであるから、そのこと自体が前の場合と全く同様な情緒的反応をよび起すことはあり得ない。そのような在り方自身、ここではすでに正視され避けられようとはしていないのだから。根本的姿勢の転換が、この種の意識に影響を与えないで済むはずはないであろう。したがってここではむしろ、「慰戯」についての認識を前提とした上での心的反応こそが問題となるであろう。ところで「慰戯」の特質はさきに見たように、そのような人間にとって不可避的な自然的在り方を容認しようとせず、そこから故意に眼を転じごまかそうとする人間の心の傾向に、またこの傾向の赴くままにあらゆる手だてを尽していたずらにむなしい狂騒を繰り返し、しかもその行為をあたかも自然的行為のごとくに装うことによって、自らの罪責を免れようとする人間の態度に見出された。「慰戯」の行為のこのような特性を十分認識したものは、どのような心境に追いやられるであろうか。多分「慰戯」におぼれているものの場合よりも、もっと救いがたい「不幸」、「悲惨」を味わわされるに違いない。な

ぜなら、ここではそれらすべては自然的なものではなく、人間的なものに由来していることを蔽い隠しようもなく承認せざるを得ないのだから。したがってこの段階においてこそ、「不幸」、「悲惨」は真に人間的な意味を帯び、それゆえに最早逃れようのない「不幸」、「悲惨」として立ち現われる。パスカルの「慰戯は我々のみじめさのうち最大のものである。」(171)という言葉も、おそらくそのような認識を踏まえてのことであろうと考えられる。

ところで、この段階において、人がこのような救いのない「不幸」、「悲惨」を突きつけられるのは、彼が単に認識するものであったということばかりでなく、彼が一方において身体性に基づく在り方を脱し得ない存在でもあるということ、密接に関係している点が見落されてはなるまい。すなわち彼は認識によってその在り方を超え出る一方、身体を有する人間という事実においてはその在り方に深くつながれ、それを超え出ることを許されない。だからこそ、彼は一方において「慰戯」を求めざるを得ない存在なのであり、このことを十分承知していればこそ、自らを一そう「不幸」、「悲惨」と感ずるのである。つまり「慰戯」について認識した人間は、身体性に基づく自己の自然的在り方を統御し管理しようとする一方、そのような在り方に引きずられ支配されて「慰戯」に走らざるを得ない存在でもあるということである。認識はかえって人間を引き裂き、矛盾の亀裂の中に救いもなく彼を投げ込む。きたんなきまでの知るもの不幸、苦悩、絶望、パスカルはそれを容赦なく味わわされたに違いない。なぜなら、彼は「慰戯」について誰よりも透徹した見解をもつものであったのだから。「幸福になるためには、むしろ自らを知らないのが人間にとり一そうよいことになるのではなからうか。」(144)という彼の言葉には痛切なひびきがある。

さて、ここに見られるのは「知ること」すなわち認識が人間を高めると同時に、無知の場合よりも一そう人間を不幸・悲惨の中に陥れるという考え方であり、これはやがて「偉大」(grandeur)と「悲惨」(misère)ないし「卑

小」(bassesse)の両対立概念による人間把握という、パスカルの中心思想へと結実して行くものであろう。それはかの有名な「考える葦」(roseau pensant)の断章(347)においてきわめて美しいかたちで語られ、続く幾多の断章で問題にされているところのものである。このように見ると「慰戯」についての見解が、パスカルの思想形成上いかに重要な地位を占めるものであるかあらためて思い知らされざるを得ない。「知」が人間の矛盾対立をいよいよ尖鋭化し、人間であることは矛盾的存在であることにほかならぬとするこのような考え方には、「知」に対する無条件的肯定はなく、そこにパスカルの思想の比類ない独自性と卓越性が見出せるように思える。だがその独自性を成り立たしめているのは人間に対する彼の洞察力の深さであり、その深さを支えるものはまた彼自身身を以て得た経験の深さにほかならない。彼が知るものとして人間的矛盾の中でいかに苦悩したか、その一つの証拠を私たちは、1655年1月25日付けの妹ジャクリヌから姉ペリエ夫人に宛てた書簡の中に見出すことができる。

「去年の九月の終りごろ、兄は私に会いに来た。この時兄は私に心を打ち明けたが、そのさまはあわれを催すものであった。彼は言った、自分が手がけている数々の大きな仕事のさなかであって、また自分にこの世(monde)を愛せしめるに足るはずのあらゆる事柄の間にいながら、しかも自分がつよくこの世に執着していると思われるのも無理からぬ事柄の中にあって、この世の愚かごと(folie)と楽しみ(amusement)に対する極度の嫌悪(aversion)と良心の絶えざる苛責とによって、それらすべてを捨てようとの心の動きを抑えきれない。あらゆる事柄から引き離されているのを感じず、今までそんなことは一度もなかったし、またそれに近いこともなかったようなそんな仕方です。」

ここには「楽しみ」(amusement)すなわち「慰戯」を通じて人間の根源的本性を見抜き、この根につながる世の一切の事柄を「愚かごと」(folie)としか見れなくなったものの苦悩、すなわち知るものの、すでに知ってしまったも

の苦悩が色濃くにじみ出ている。彼にとって世界は全く違った色調を帯びて立ち現われ、今まで有意味と思われたものが無意味に転化する。彼は最早この世にいられない、しかしながら彼に別の世界が用意されているわけではなく、彼はこの世にとどまらざるを得ない。彼は進むことも、また退くこともできない。その無力感と絶望。ここにはパスカル自身が直面した救いのない心境が、簡潔な中にも痛々しいまでにリアルに写し出されている。

だが、「慰戯」の認識を通じ人間の根源的悲慘に逢着したものの絶望がいかにか深かろうと、彼はそこにとどまり得ず、そこを超え出て行かなければならないことは明らかである。なぜならすでに見たように、彼は「慰戯」の基本にある身体性を中心とする人間の在り方を、最早避けようとはせず、正視しているのであるから。それは一つの態度決定であり、超克への志向である。だから「慰戯」について認識したものは、徹い隠しようのないあからさまな人間の悲慘に直面すると同時に、それを超え出て行く方向性へ向けて用意されてもいる。この方向性は、彼が「慰戯」におぼれるものとは全く逆の態度をとった時から、すでに明確であったと言える。彼の前にはただ一つの方向性、ただ一つの道、すなわち超克への道しか指し示されてはいない。だが彼には一方、身体性という逃れようのない事実が懸けられている以上、その道は安易にたどることを許されない道であるにしても。このことは、「慰戯がないならば我々は退屈するであろう、そしてこの退屈は我々にそこから逃れ得る確実な方法を求めさせるであろう。」(171)というパスカル自身の言葉によっても裏付けられる。ここには、「慰戯」の段階にすでにとどまり得ないものの向うべき方向性が示唆されているのであるから。したがって、知るものの絶望と無力に打ちひしがれた状況の中においてさえ、パスカルにとって克服の方向性は当然予感されていた。続くジャクリースの書簡がそのことを立証する。

「けれども自分は神の側から全く見棄てられており、神の方からの招き (attrait) も感じな

い。全力を尽して神に向おうとするが、自らを最善のものへと駆り立てるのは、自らの理性と精神とであって神の霊の働き (mouvement) ではないことをはっきりと感ずる。自分のまわりのあらゆる事柄に執着がなくなった今、以前と同じように神を感ずることさえできるなら、どのようなことでもできると思う。」

ここでパスカルにとっての超克への方向性は、「神」(Dieu) への道を指すことが明らかになる。ではなぜ、パスカルにおいてこのような方向性が志向されたのであろうか。それは、彼の透徹した認識がおのずから導いた、何ものによってもつくり得ない人間的矛盾の深い亀裂をつくり得るものがあるとすれば、そのものは人間の力が及ばないもの、人間を超えたもの、すなわち「神」でしかあり得ないという洞察によるものであろう。彼は「知」において誰よりも深くとどき得ただけ、誰よりも鋭敏に人間の限界をも察知し得たことであらうから。そのことはまた、彼自身の思想上の歩みにも一致する。人間を「偉大」と「卑小」、「悲慘」の対立概念によって把持したパスカルは、この矛盾の統合を「キリスト」(Jesus-Christ) の中に見出し、そこにおいてはじめて矛盾が解消されることを証明しようと試みたのであったから。この点においても「我々のみじめさのうち最大のものの」(la plus grande de nos misère) (171) と規定された「慰戯」の問題が、彼の思想の頂点近くに位置することが判明になる。なぜならさきの彼の考え方の図式にのっとれば、最大の「悲慘」は最大の「偉大」につながり、ここにおいてこそ矛盾は最も深刻なものになるであらうから。そしてまた、最大の矛盾は、その解決に最も近いところに位置付けられるであらうから。だが無論まだこの段階においては、矛盾が解決されているわけではなく、解決の方向性だけは予感されているものの、矛盾の深淵はますます深く、その亀裂はいよいよ大きいと言わなければならない。その中に放置され苦悩するパスカルが、「キリスト」を通じ決定的に「神」の方に招き寄せられるためには、なお彼自身によって「火」(Feu) と名付けられた衝撃体的

験を経なければならなかった。そしてこれを契機に、彼にはまた新たな苦難の道が開かれて行く。

以上、パスカルの「慰戯」について考察をすすめて来たが、それは「慰戯」の見解の単なる客観的提示に終らず、彼自身の生涯の歩みとおのずから重ならざるを得なかった。「慰戯」の見解を問題にすることは、彼の生の苦闘の軌跡をたどることにそのままつながった。パスカルにおいてはその生涯と思想とを切り離すことは不可能であり、「慰戯」の見解もその点決して例外ではあり得ない。こうして私たちは、彼のこの見解がその生涯と思想の極点に最も近く位置し、そこへ至るための不可欠の逆接的階梯として、極めて重要な意味をもつとの結論に導かれる。

さてこのように見て来ると、パスカルの「慰戯」についての考察を通じ私たちの前に究極的に提示されるのは、人間の問題であり、人間が生きることの問題であると言うほかないのではあるまいか。「知ること」の苦悩を通じ人は自

らを超え行くものであり、超え行かざるを得ないものである。この見解において、パスカルが身を以って示そうとしたものはそれであった。したがって彼の「知」は単なる「知」に終らず、事態に直面する勇氣と決断に支えられ、だからこそ事態を克服することを可能にした。それは実践から切り離せない全人間的な「知」であり、その意味で真に力ある「知」であった。だがそれゆえにこそ、人を苦悩に追いやり、苦闘と苦難の道を彼に課しもしたのである。だがこれ以外に人間の歩む道はなく、これのみが人間の道である、パスカルはそれを知り、決然としてこの道を歩んで行った。そして「私はともかくこの道を歩んだ。そのために私のすべてを投入した。だから君たちも。人間ならば。」と無限の愛と厳しさを以て私たちに呼びかけているように見える。私はパスカルの中に人間であることの苦悩を生き抜き、どこまでも人間であろうとした人の、人間であり続けようとした人の典型を見出すことができる。

〔註〕

- 1) 「覚え書き」《Le Memorial》(1654) 参照
- 2) 《divertissement》は普通「気晴らし」などと訳されることが多いようであるが、この訳語から受ける印象は余りに軽いもののように思えるので、新潮文庫「パンセ」の訳者津田稔氏にしたがい、一応「慰戯」と訳しておく。なぜなら後述のように、パスカルのいわゆる《divertissement》

は決して軽い意味をもつものではなく、人間の根源に根ざすより深い意味を与えられているのであるから。

- 3) 番号はすべて、Brunschvicgによって付された各断章の番号付けを示す。
- 4) 「パンセ」は、パスカルが「キリスト教弁証論」のために書きためた、覚え書き的原稿であったと見なされている。